
とある魔術の頂上戦争

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の頂上戦争

【Nコード】

N5727X

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

9月28日…上条当麻はマンホールに落ちた。そして辿りついたところはドブ臭い下水道……ではなくて、『白ひげ海賊団』の船だった。しかも、これからエースの処刑を止めるためにマリンプォードへと向かう途中の……

プロローグ（前書き）

新連載です！不定期更新ですがよろしくお願ひします。

もし、誤字脱字、誤りがあったら、ご指摘してくださいませるとつねしいです。

プロローグ

9月28日

そう……その日も上条当麻は、朝から「不幸」だったと断言できた。

朝から同居人のシスターさんに頭を噛まれ（彼女の好きなアニメの録画を消してしまったからだが……）

学校へ行く途中で2回くらい車と衝突しそうになり（焦って信号無視をしたからだが……）

自販機に2000円飲み込まれたり（よく考えてみると、以前もこの自販機に飲まれた気がする……）

だが、それだけだったのなら、上条当麻の許容範囲内だっただろう。事実……彼も、この時までには「仕方ない」と諦めていた。

そう……この時までには……

そのあと彼は、家……と言っても学生寮だが……に一応、帰宅。制服のまま夕食のしたくをしている。

「ねえ、とうま、とうま……とうま……とうま……」

居間で声を張り上げているのは、同居人の禁書目録インデックスという名のシスター。

『シスターさんと高校生が同居しているってどういうシチュチュレーシヨン!?!』

っと思うだろうし、説明がほしいに違いないが……それは上条当麻自身も言えることなので、省かせてもらう。

そう……実は、彼には夏休み上旬以前の記憶がない。何故、記憶が飛ぶような事態になったのか分からないが、とにかくにも、インデックスというシスターの少女と出会った時の記憶がないのだ。だから、どうして彼女が、この家に居候しているのか分からない。

「とうま!ねえ聞いている!?!もしかして、シカトっっていうやつかも!?!」

「はいはい、行きますよ。なんですか?」

火を止めて上条が居間へ向かうと、インデックスは雑誌に釘付けだった。

「ねえねえ、とうま!!!これ見てよ!!!」

「ん?……なんだ?」

「見て分からないの?海賊の話だよ!!!」

「海賊?…ああ…ワンピースね…」

めちゃくちゃ最近はやっている漫画…少しなら上条も内容を知っていた。

「あのね、この漫画って…」

「はいはい…どうせ『悪魔の実』はナンタラの魔術の応用で生み出されたもの』とか『ワンピースの正体はウンタラ錬金術の応用』みたいなことだろ？」

「…とうま〜魔術を馬鹿にしてるでしょ…」

冷めた目をするインデックス。

「馬鹿になんてしてませんよ。……ん？」

ポケットの中の携帯が音を立てた。

「ん？…メール？」

差出人は不明…

「『上条当麻：今から下のコンビニにすぐ来られたし』？誰だこれ？……まあ、行かないと、さらに不幸になったら嫌だしな…わりのインデックス。ちよっと出かけてくる。」
「とうま。どこか行くなら、お菓子買ってきてほしいかも。スフィックスが勝手に食べちゃって…」

見てみると爪らしきものでズタズタに引き裂かれたお菓子の袋が散在していた。

「はいはい…買ってきますよ。」

上条は外に出た。

第1話：マンホールを抜けるとそこは…

…上条当麻は、マンホールの中をダイビングしていた。

背中から落ちていたので、下の様子が全く見えないのが、怖い。ただ、黒い空間だけが、上条の周りにあった。

しかし、いつまでも落下しているわけがない。これはマンホール。いつかは下水道にたどり着くはずだ。

…いずれ来るであろう衝撃を予想し、思わず上条は目をつむった。

バツシャーン！！！！

ゆっくりと目を開けると、もやで視界が悪いが、一面茶色の世界だった。

…そしてこの時…上条は、はっきりしない意識の中で、妙な事に気が付いた。

自分は、どこにでもあるマンホールに落ちた。ということとは、辿りつく先は底冷えするような下水のほず。

なのに、今…自分が浮かんでいるのは水…じゃなくて、ちょうどいい感じのお湯……

下水道といえば、誰もが口元を覆うドブ臭さで充滿しているはずなのに、鼻に入ってくるのは、どこことなく甘い匂いだった。

それ以前に、下水道なら天井が茶色のわけがない…もっと…汚れた灰色のはずだ。

上条は、そつと立ち上がった。……幸いなことに、お湯は浅いようで、ちゃんと足の裏が地面についた。

お湯は自分のヘソの位置までしかない。

もやで視界が悪い中、ゆっくりあたりを見わたす。

見ると、悪い視界の向こうで、何人かの人影が身を寄せ合っているのが見えた。

「あゝ、すみません。ちょっと尋ねたいことが…」

ココまで口に出した時、上条はあることに気が付いた。

まず、人影が恥じらうような仕草をしているということ…

その次に、その人たち全員が、何も身にまわっていないということ…

最後にその人影が…

(なんで、マンホールの下に銭湯が広がっているんだ!?!
いや…そんなことよりも、まずは上を目指そう!?!地上へ戻らな
く
ては!?!)

上条は、ひたすら走った。途中でなんか人とすれ違った気がするが、
今はそんなところではない。
ただひたすら上を目指した。

「出口か!?!」

階段を上り切り、扉を開けると、確かにそこは外だった。

「……………なにこれ?」

耳に入ってくるのは波の音……………だけ……………。

そう……………たどり着いたのは地上ではなく……………海の上……………正確に言えば、ど
こかの船の上だった。

第2話 空から落ちてきた少女

上からは眩し過ぎる太陽が肌をやく。…頬を撫でる風には潮の香りが混ざっていた。

リゾート地に早変わりできる気候の中で、上条当麻は縄で縛られていた。

周りにいるオッサンたちの気迫に負けないように、上条は精いっぱい声を張り上げる。

「さつきから言ってるじゃないですか！

マンホールを抜けたら何故か女湯で、人畜無害な上条さんは、あわてて地上に戻るため外に出たら何故か甲板で船の上だったんですって！……」

彼に『この場から逃げる』という考えが全くなかったので、正直に本当のことを話す。

上条はいままで…といっても記憶にある限り、かなり喧嘩をしている。

元々の不幸体質のせいで武装したスキルアウトや能力者の不良の喧

嘩に頻繁に巻き込まれるため、その経験上ある程度は喧嘩慣れしており打たれ強く体力もそれなりに自信がある。

戦闘スタイルも、右手に宿る力『幻想殺し』で相手の能力を無効にしているから、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術にしている、この方法で、学園都市のNO・1の実力者を倒したことがある。

しかし、それは相手が能力に頼り切っていて、基礎的な身体能力が低いからだからだ。

つまり、目の前にいる人たちのように、筋肉が凄くて見るからに『強い』人になうわけがない。

武器でもあれば、話が変わるかもしれないが、彼が今持っているものは、菓子が入った袋だけだった。到底、武器と言える代物ではない。

だから、正直に話して分かってもらうほかなかった。

「ホントかよいい？」

「本当ですって……！」

こんないつ殺されるかどうか分からない状態で嘘がつけるわけない

じゃないですか!!

だいたい俺は『霸气』ないし『悪魔の実の能力者』じゃない、普通の『彼女いない歴〃年齢』の高校生ですよ!? 恋愛フラグが一切ない人畜無害な高校生を縛り付けるって、おかしいじゃないですか!

「まあ…嘘を言っているみたいには見えませんが……」

「でも、いきなり現れるっておかしくない?」

「でもここは、『偉大なる航路』^{グランドライン}だから、何があっても不思議でないよな。」

……

「(あれ?なんか今…ものすごい聞き覚えのある単語が……?)」

あの、すみません!!いま、グランドラインって言いましたか?」

「言ったが…それがどうした?」

上条はじいじと一人一人の顔を見直した。

『偉大なる航路』というのは、漫画・ワンピースに出てくる海の名前。

こうしてじいじと見てみると、目の前にいる男たちにも見覚えがある。

…もっとも、名前が分かる人は2・3人だったが。

「ここって、もしかして『白ひげ海賊団』ですか？」

「それを知らずに、乗り込んだのかよい？」

見事なパイナップル頭の男：白ひげ海賊団一番隊隊長のマルコが、
答える。

「だから、何度目ですか!？」

俺はマンホールから急降下ダイビングして、気が付いたらここに
たって!!

つーか、異世界トリップか!?!なんでワンピースの世界!?!
不幸だ!?!

なんで、こんな死亡フラグが半端なさそうな世界に来てしまったの
だろうか。

今までも死にそうになったことが沢山あったが、今回は本当にここ
で死ぬかもしれない。

「異世界トリップ?よく漫画とかである?」

この船にしては珍しく平均的な体つきの男……隊長格なのは確かだ
が、上条は名前が思い出せなかった。

「はい!物わかりが良くて嬉しいです!」

「本当か？胡散臭いな……」

「証拠はあるのか？」

「証拠？」

考え込む上条だったが、証拠なんて思いつかない。この世界に来ようと思ってきたわけではないのだ。そんな証拠となるようなものなんて持っていない。

「ん？」

「きゃあああああ！！」

頭上から声が降ってきた。上条を囲む人たち（つまり、白ひげ海賊団の隊長たち）が上を向くので、つられて上条も上を向く。

なにかが近づいてくる……見る限り人のようだ。

「なっ！？」

上条の顔が引きつった。

なぜならその人物は………

「うぐっ！！」

「いたたた………」

なんで、この私がマンホールに落ちないといけないのよ………
？…って…ああ！！あんた！！なんでわ…私の下にいんの！？？」

女はあわてて上条の上をどいた。

「うう…なんでビリビリまで……………」

これから事態が好転するとは思えない…

「不幸だ……………」

上条当麻は、ビリビリ中学生こと、学園都市のNO.3……御坂美琴をみてため息をついた。

第3話 何事も口裏合わせが大事

「なんであなたがここにいるの!? っていつか、なんでマンホールから落ちたのに、海の上!？」

「…お前もマンホールからトリップかよ……」

「な…なによ!!」

仕方ないじゃない! 黒子の奴が、いきなり飛びついてきたのが悪いのよ!」

「あ…それで避けようとしたら落ちたってことか……」

「文句あるわけ!？」

「いや…文句というよりこの状況…なんつーの…不幸だー」

上条は真っ赤な顔で怒ったように話す美琴を見て、ため息をついた。

「不幸だつて…ん？」

美琴は周りの状況に気が付いたらしい。

じいーっつと周りにいるオッサン達の顔を見る。

「ねえ…もしかして…ここ… 『モビー・ディック号』!？」

「も…モビー…?なにそれ？」

「はああ!?! あんた知らないの!?!」

バツかじゃない！？っという顔をする美琴。

「いい？『モビー・ディック号』っていうのは、『ワンピース』に出てる『白ひげ海賊団』の船のことよ。

頂上決戦の時に燃えちゃったけど、ルフィ達の『ゴーイング・メリー号』や『サウザンド・サニー号』より、はるかに大きくて…はつきり言ってるあのマンガに出てくる船の中で最大級なんじゃ……

……っつて、どうかしたの？」

「い…いや……よく知ってるな…っつて…」

ペラペラ漫画知識を披露する美琴に若干引く上条。

学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』のお嬢様のイメージから、かけはなれていた。

「なによ？こんなの当たり前の知識じゃない？

アンタは読んでないの？」

「いや…少しだけならな。『アバラスト編』位までなら…」

「『アラバスタ編』ね。

っつていうか、まだそこなの！？もう本誌でルフィは、とっくに19歳になっているっつて言うのに。」

「あんなあ…」

「おい、なに不吉なことを言っているんだよい？」

見るとマルコが殺気を出していた。

「この船が燃える！？なに言ってるんだよい！？」
「……………」

何故か黙り込む美琴。

「おい！！なんとか言えよい！！」

「……………」

本当にブーチの護と同じ声だ！！」

「はあ？」

「お願いだから『正解』って叫んでみて！！」

または、『ペガサス 星拳』でも構わないから！！」

目をキラキラさせる美琴。

「……………おい、御坂…相手が困ってるぞ？」

「えっ？」

「そんなことよりも…ちよつとこっちに来い！」

「えっ！あ…ちよつと…！！」

マルコに『ものまね』をせがむ美琴の腕を引っ張る上条。
そのまま船の端の方まで連れて行った。

「あのなあ……って、なんで赤くなってるの？」

「そ…それはあんたがいきなり………」

「いきなり…なんだ？」

「ああもう！！で、なんなのよ！！」

「実はさあ……ちょっと原作知識を披露するのは止めないか？」

「？なんでよ？」

「いや…だってさあ……気味悪いって思われるだろフツー？」

だって、誰か不特定多数の人たちが俺たちの知らないところで俺たちの存在や行動を知っているってなんか嫌だろ？」

「そりゃ………そうね。悪かったわ。」

うなだれる美琴。なんか、罪悪感を感じる上条だった。

「ああ…それでさあ、言ったことはもうアレだから、口裏を合わせるぞ？」

「そ……そうね。」

額を合わせて話す上条と美琴。

「おい！！話はすんだのか！？」

さっさと答えるよい！！」

「あ…あはは…悪い悪い。」

作り笑いを浮かべて上条は振り返った。

「俺たちはさっき言ったみたいに『異世界』から来たんだ。」
「で、異世界の奴らがなんで、この船を知ってるの？」

和服を着た人が話しかけてきた。

「じゅ…数年くらい前に、一度この世界にトリップしてきた人がいたみたいなんだよ。」

で、その人が遠くからこの船を見た時に、なんか…」

「火柱が上がってたから、燃えたように見えたんだって。『モビー・ディック号は燃えた』って伝わってたのよ。」

「数年前…火柱…ああ…エースの仕業かな？」

「あ〜…ありえるよい。」

まだ、完全に信用していない眼だったが、納得の色が見え始めた。

「でも、異世界から来たって証明できるのか？」

空島の住人についても考えられるだろ？」

「そ…空島？」

原作知識にない言葉が出て戸惑う上条。

「空島ってというのがどういうところか知らないけど、これを見たら

納得してくれる？」

空島を知っている美琴は、上条に合わせて空島を知らないふりをする。そして、ポケットから携帯電話を取り出した。

「これは、携帯電話って言って、いわゆる電電虫みたいなもので、遠くの人と話が出来たり、写真が取れたり、メールが出来たりするの。つていつても、今はアンテナが圏外だから通話もメールも無理だけどね。」

携帯を受け取りいじくる隊長たち。

「たしかに、この世界にはないモノだね。」

「面白いな、異世界人なんて。」

「さすが『偉大なる航路』だぜ！！」

そんな様子を見た上条と美琴は『上手くいった』と目を合わせた。どうやら、信じてくれたみたいである。

「で、どうやって帰るんだ？」

「そ…それが…肝心なところが伝わってなくて…」

このまま、白ひげ海賊団に居候させてもらえれば、衣食住の心配はなくなる。

「そうか…困ったな…早く帰ってもらわないと、危険なのに…」

「危険？」

「そうなんだ。実はこの船…」

今にも処刑されそうな仲間を救出するために、全勢力を集結させてある敵の本拠地へ乗り込むところなんだよ。」

しばらく固まる二人……

「なんだか分からないけど、不幸だ!!!」

「ええええええ!!! (今って頂上戦争の時期なの!?)」

それぞれ違う意味で絶叫する、上条と美琴だった。

第3話 何事も口裏合わせが大事（後書き）

10/18…誤字が発覚したので、一部訂正しました。

第4話 どこの中でも許されないことがある

「仲間？一体誰が………つて、どうしたんだよ、顔色悪いぞ？」

上条は真っ青な顔になった美琴をみて首をかしげた。

「も…もしかして、処刑されるのつて…エース…？」

美琴の震える口から紡ぎだされた言葉に一同が驚いた。

「おい、嬢ちゃんはなんでエースを知ってるんだ？」

「そ…それは………以前にトリップした人が、エースの母親のルージユさんがエースを出産する場面に立ち会ったから………」

「つてことは、エースの父親の事も知ってるんだな？」

美琴はうなづいた。

「私も手伝う！！エースを死なせるわけにはいかないわよ！！」

私、こつ見えても元の世界でNO.3の実力者なんだから！！」

「おう！そうなのか！？助かるぜ！！」

「でもよ、そういう話は親父にとおさねえと不味いんじゃないかよ
い？」

「確かにそうだな…よし！親父の所へ………」

「待て待て待て」

上条が盛り上がっている中に割り込む。

「な……何つーか……話についていけないんだけど……」

その…… エースって誰？つてか、なんで処刑されそうになったわけ？」

「……あんた……アラバスタまで知ってるんじゃないの？」

「そうだけど……そんな隅から隅まで知ってるわけじゃ……」

はあ…… っとため息をつく美琴。

「エースっていうのは、麦わらのルフィのお兄さんで、海賊王『ゴール・D・ロジャー』の息子よ。」

「……ああ……あのメラメラね…… ってことは、ルフィの奴も海賊王の息子なのか！？」

「いや……そうじゃないけど……」

「で、なんで処刑されそうなんだよ？」

「そ……それは……」

美琴はあさつての方向を向いた。

恐らく美琴は、なんでエースが処刑されるのかを知っているのだろうが、先程『あまり原作知識を人前で言わない』と約束していたので言うことが出来ないのだろう。

「奴の部下の“黒ひげ” ティーチが白ひげ海賊団最大の罪「仲間殺

し」を犯して逃亡したんだよい。だからエースはティーチ討伐に向かったんだよい。

だがよう、負けて海軍に引き渡されたんだよい。

海軍は海賊王の血を完全に断つため、エースの公開処刑を行うことに決めたんだよい。」

マルコが苦々しそくに説明する。

他の隊長たちも顔から怒りがにじみ出ている。

「つまり…裏切り者を倒そうとして返り討ちに合って…ん？じゃあその「黒ひげ」って奴はどうなったんだよ！？」

「ティーチは…エースの首を手土産に『王下七武海』に入りやがったんだ。」

「『王下七武海』？…どっかで聞いたことが…ああ！！思い出した。クロコダイルが入っていたやつか。」

その瞬間、上条の思考が一旦とまった。

『王下七武海』…それは簡単に言うと、政府に略奪を許可された海賊の事だ。

クロコダイルとは、その王下七武海に所属していた海賊で、アラバ

スタ王国の紛争を巻き起こした張本人。秘密犯罪会社「バロツクワークス」を密かに立ち上げると、ダンスパウダーを使って、アラバスタ国民の国王への反感を煽るなどして、国の転覆と、国に伝わる古代兵器「プルトン」を手に入れようとした奴だ。

最終的に、政府を凌ぐ軍事国家を築くことが目標だったらしいが、そのために何十…何百もの人の血が流れたかは考えたくもない。それも、自分の配下の血だけではなく、全く関係のない一般人の血がほとんどなのだ。

「ゆるさねえ……」

上条は拳を握りしめた。

インデックスが見ていたワンピースの再放送に出てきた「王下七武海」のドンキホーテ・ドフラミンゴも脳裏に浮かんだ。

彼の真の目的は分からない…だが、人身売買を行っていたのだ。一応は手を引いたらしいが、その理由は「順調過ぎて退屈だった」からだ。

「ゆるさねえ……あんな葉巻鱈や、もふもふピンクの仲間になるためだけに、元々の仲間を殺して……海軍に引き渡したりしたら、公開処刑が待っていることを知っていても……目的のために自分の上

司を海軍に差し出すなんて……」

ぎりぎりつと歯を食いしばる上条。
そして、じつと自分の右手を見た。

「おい、お願いだ！！俺も仲間に加えてくれ！！
俺がこの右手で、エースを処刑するっていう幻想をぶち壊してやるんだ！！」

どことなく無気力そうだった少年の雰囲気が一気に変化した。
「誰かを絶対に助けたい」という気持ちが全身からにじみ出ていた。

「って！何すんだよ、ビリビリ！！」

上条はいきなり美琴に後頭部を叩かた。

「あんたって、本当におせっかいよね。」

「そういうお前だって『手伝う』って言ってたじゃないか！！」

「そりゃあ、エースに死んでほしくないからに決まってるじゃない。
アンタより私はエースについて知ってるし。」

でも、アンタは、ほとんど今まで知らなかったんでしょ？よく毎回
見知らぬ人のために動けるわね。」

「ほっとけないだろ。仲間を利用するなんて許せないしな。」

美琴はそれを聞くと呆れたように笑った。

「なんだよ？なんか悪いか？」

「悪くないわよ。あんたらしいって思っただけ。

感謝しなさいよ。このLv5で学園都市No.3の超電磁砲レベルガンの美琴様がアンタの味方なんだからね。このLv.0さん。」

「……馬鹿にしてるのか？」

「し……失礼ね！！！」

「だいたい、私はアンタに一度も勝ったことがないから、ここでアンタより先に救出して、アンタより強いことを証明してやるんだから！！！」

「証明って……御坂さんのほうがはるかに強いですよー。

「この間の大覇星祭の賭けでも、お前が勝ったじゃないか。」

「そりゃそうだけど……それとこれとは違うの！！！」

「……痴話げんかはそこまでにして、そろそろ親父のところへ行くよい。」

マルコの言葉で一気に覚める2人。

……そこで二人は親父……世界最強の海賊・エドワード・ニューゲートと対面し、彼の「息子」と「娘」になる。その時、エース処刑場で……残り約6時間で……

刻一刻と船は、海軍の待ち受ける「マリンフォード」へ針路を進めていく……。

そして、同時刻……もう一つの物語が動き出していた。

……インペルダウン……

そこは、拷問室と死刑台が立ち並び、世界中で暴れ回っていた凶悪な犯罪者達でひしめき合っている大監獄であり生き地獄。

その地下6階「LEVEL6」「無限地獄」

起こした事件が残虐の度を越えたため、政府により存在をもみ消された終身囚・死刑囚が幽閉されるフロア。超大物や伝説級の危険人物が幽閉されているため、存在は秘匿されている……

しかし、このフロアに似つかわしくない人物が突如、現れた。

「痛ったいってミサカはミサカは打ったお尻を触ってみたり。
ってゆーか階段から落ちたはずなのに、なんでこんな所にいるんだ
ろうってミサカはミサカは疑問を口に出してみたり。」

ワンピースを着た外見年齢10歳前後ほどの少女……ラストオーダー打ち止めが現
れたのだった。

第5話 誤解は意外と簡単に生まれやすい

……学園都市第七学区にある病院……

「ってことは、あの子はこの階段から落ちたということだね？」

カエル顔だが、腕は一流と言われている医者：冥土返しが、無表情のまま階段を指差す少女に尋ねた。

「……ヘウンキャンセラー」

「正確に言えば、トイレに行こうと走った結果、足を滑らせてここから落ちてしまった」ということですね、とミサカは説明します。」

「……で、俗に言う『異世界トリップ』というのをしたということね……」

「そうとしか考えられません、とミサカは断言します。

なぜならミサカネットワークで伝えられた情報によると、検体番号20001号は現在、見知らぬ牢獄らしきところで、ワンピースに登場する『クロコダイル』と会話をしているところですから……

それに『「階段」という場所は異世界へ通じやすい』という情報を手に入れたミサカがいますし……と、ミサカは懇切丁寧に説明します。」

「……漫画の世界にトリップってわけかよオ……
で、どうすれば奴は帰って来るんだ？」

学園都市No.1の能力者：で、この病院に入院中の少年、アクセラレ一方通行は先程から無表情で説明をしているクローン人間：シリアルナンバー検体番号10032号 ……通称：妹達シスターズor御坂妹に詰め寄った。

「異世界トリップというのは、何かしらの目的を達成しないと帰ってこれない場合が多いから……」

シスターズ妹達の代わりに同じくこの病院に入院している科学者、芳川 桔梗が答える。

「この場合だと、おそらく『Eース救出』をクリアしたら戻ってこられるんじゃないかしら？」

ただ…一生帰ってこれない場合もあるから、なんとも言えないけどね。」

「あいつ1人でEースを助けられるとは、考工られねエな。」

「じゃあ、君が助けに言ったらどうかね？」

「あア？」

「幸いにもバッテリーの予備はかなり用意したからね。」

「頂上戦争まで行くようだと、戦いが多いから予備は出来る限りたくさん用意しないと……」

「オイ、芳川！俺はまだ、行くとは言つてねエぞ！！！」

「あら？でも、この状況下で彼女を助ける力があるのは貴方だけよ？幸いにもミサカネットワークが通じるから、貴方の演算能力も使えると思うし。」

「……っち、くそつたれがア！！！」

こうして、最強の能力者は階段でわざと足をふみ外したのだった。

「……おい！！イワちゃん！！誰か降ってきたぞ！！！」

新旧七武海のジンベエとクロコダイルを檻から出して、逃走経路を確保した時だった。

ルフィの目の前に突如、何も無い空間から1人の少年が落ちてきたのだ。

白い短髪と赤い瞳に中性的な体格をしていて、杖をついていた。そして……白とグレーの縞柄の長袖Tシャツから察するに、囚人ではなさそうだ。

その少年はクロコダイルをまっすぐ睨んだ。

「……オイ。正直に答える。ここにガキが来なかったか？」

「ガキ？あぁ……アホ毛のガキか？」

「クロコボーイの知りあい？」

「いや…さつき煩いくらい一方的にしゃべりかけてきやがった…
テメエがアレの保護者だったのか？」

「どこにいるんだ？」

「海の上です、とミサカは即座に答えます。」

「！？お前…いつの間に……」

振り返ると先程の妹達シスターズが立っていた。

「おっ！！お前も急に現れたな！！」

「ヴァナアタ…どうやって……」

「冥土返しに言われて来ました、とミサカは答えます。

私ならミサカネットワークで打ち止めの居場所も分かりますから、
とミサカは面倒なことに巻き込まれたことを恨みつつ、説明をしま
す。」

「それより、海の上ってなんだ？説明しやがれ！！」

「それはワシが走りながら説明しよう。」

ジンベエが前へ出た。

「早くしないとエース君の処刑も、彼女の処刑も止められなくなっ
てしまうのだからな。」

「そうだった！！急ごう！！……って、彼女も処刑ってどういう
意味だ？」

ルフィがイナズマの作った坂を走りながら問いかける。

「うむ。実はだな……………」

〈回想シーン〉

「うわぁ！！本物のエースだ！！ってミサカはミサカは興奮してみる！！」

『エースはもう来ているって』クロコダイルが言ってたけど本当だったのね、ってミサカはミサカは一瞬疑ったことを心の中で謝ってみたり。てゆうか、本物のエースだよぉ！！！！」

1人の幼女がピョんピョんと檻の前で跳ねていた。

「エース君の知り合い？」

「いや……………だれだ？」

「打ち止めっていうの、助けに来たんだよってっミサカはミサカは胸を張って答えてみる！！」

「ラストオーダー？変な名前だな。」

「へ…変な名前って……………これはミサカの意志で命名したのではないから、変って言われたらちよつと悲しいかもって、ミサカはミサカはしょんぼりとうなだれてみたり……………」。

ってか、助けに来たんだよって言ったのに、何の感慨もないわけ？

ってミサカはミサカは疑問を問いかけてみる！」

「……………お前…ミサカって名前なのかラストオーダーって名前なのか、ハッキリしたらどうじゃ？」

「えつとね……………」

ミサカは御坂美琴のDNAマップを元に作られた妹達シスターズが反乱や暴走をした時に備えてつくられた上位固体で、他の個体に対する制御や命令権を持つミサカネットワークの管理者なの。

だから、口癖で一人称が「ミサカ」なんだよってミサカはミサカは説明してみるけど、理解できる？」

「いや、さっぱり分からねえ。」

っていうか、さっさと逃げやがれ！！あぶねえぞ！！」

エースが声を張り上げるが、幼女は動こうとしなかった。

「だって……………見殺しには出来ないよってミサカはミサカは真剣に答えてみる。」

その瞳は言葉通り真剣そのものだった。まっすぐエースをみつめている。

「ミサカは単価18万円…つまりこの世界に換算すると18万ベリシスターズで製造可能のクローンで、20000体の妹達の総称の事なのってミサカはミサカは妹達のせつめいから始めてみたり。」

で、妹達は「絶対能力進化（レベル6シフト）実験」で1号から1

0031号まで殺されたんだけど、それまでは計画のためだからって特に何も思わなかったの、ってミサカはミサカは告白してみる。たしかにミサカ単体が破壊されたときには、全ミサカをつなく脳波リンクからその個体の存在が消されるけれど、ミサカの最後の一体が死ぬまで破壊されたミサカの記憶や情報自体が消えるわけではないから、実験にはなんの損傷もないわけ。

でもね……ミサカ単体が死ぬことに涙を流す人がいるんだってことをミサカは知ったの。だから、これ以上は誰一人として死ぬわけにはいかないってミサカはミサカは宣言してみる!!」

「……なんか難しい話でよくわからないんだが……」

「つまりね……人造物のミサカ単体のために涙を流す人がいるんだから、貴方だって死んだら涙を流す人がいるはず、だから死ぬのは良くないってミサカはミサカは説得を試してみる。」

そういうと、打ち止めは優しい姉のように微笑んだ。

エースは何も言えなくなった。

「お前……」

「そこで何をやっている!!!!」

その時厳しい声がとんだ。

打ち止めの後ろには、いつの間にか監獄長のマゼランをはじめとする監獄職員が立っていた。

「お前……」

「うひゃあ！ちょっと不味い状況下もってミサカはミサカは恐怖でわなわな震える身体を押さえられなかったり……」

「この男を助けに来たのか？」

マゼランが問うと、打ち止めはガクガクしながらうなずいた。

「ラストオーダー！！逃げろ！！」

エースが力の限り叫ぶ……が……

「こ……腰が抜けて動けないみたい……ってミサカはミサカは現状報告をしてみる……」

顔が引きつっている打ち止め……

それを見たマゼランは……

（これはなんだ？）

現状把握に苦しんでいた。

服装や健康状態からさっするに、どう見たって外部の人間だ。しかも幼女……

侵入者の” 麦わらのルフィ”と一緒に侵入したとも考えられるが、この少女はなんでこの最下層のフロアにたどり着くまで、監視の目に留まらなかったのか……………そもそも、なんでこの少女はエースを救出に来たのか……………

「おい、これもエースと共に連れて行くぞ。」

「えっ？」

マゼランについてきていた女職員は、急なことでイマイチよく分かっていなかった。

「しかし…拷問の上で監獄へほおりこめばいいのでは？」

「火拳のエース」を助けに、誰にも知られぬようにココまで来たコレがただモノに見えるか？
恐らくこれは……………

エースの実妹だ。

先程の会話の中にも、よく理解できなかったが「妹」という言葉が出てきたしな。

そうでなかったとしても、海賊を助けに向かったものへの見せしめともなる。

いずれにしろ、本部へ送った方が身元も早く割れるだろうしな。

……………連れて行け。」

〈回想シーン終了〉

「…………クソ餓鬼がア…………」

話を聞き終えた一方通行は、呆れと怒りがごちゃ混ぜになった声を出した。

「…麦わら。俺も仲間に入れやがれエ。オツと勘違いすんじゃないぞ？俺はアノ餓鬼を取り戻しに行くだけで、お前の兄貴なんて知ったこっちゃねエ。」

ただ、目的地が同じだから手を貸してやるってことだ。」

「…いいぞ。ってか、お前の能力ってなんなんだ？」

「…………気が付かねエのか？俺が今、どうやって動いていんのかをなア？」

そう…今、一方通行は、少し浮くようにして走っていた…否、走っているのではない。滑っていたと表記した方が正しいだろう。

「アルビダみたいな感じで『摩擦』をなくしてるのか？」

「摩擦ウ？違エな。」

これは反射…正確に言えば『ベクトルの向きの変換』だア。

そついやア…自己紹介がまだだったなア……………

俺は学園都市最強のLV5の超能力者…「アクセラレータ一方通行」だア!!」

白い髪に赤い目の少年はニタリと笑った。

第6話 彼を止める者は誰もいない

……海の上……

鳥の声1つしかない……聞こえるのは処刑台のある町へ近づいていく船の音のみ……

「悪いな。せつかく助けに来てくれたのにこのざまだ……」

もう二度と見上げることはないだろう空を見つめたままエースは隣にいる幼女「ラストオーダー打ち止め」に話しかけた。

「確かにミサカは貴方を助けられなかったけど……ミサカは全然不安じゃないよってミサカはミサカは自分の感情をあらわしてみる。」

「なんで不安じゃないんだ？」

「だって……あの人が助けに来てくれるから……貴方の弟と一緒にミサカ達を助けに来てくれるってミサカはミサカはミサカネットワークを通じて分かった喜びをあなたに伝えてみる……」

確かに打ち止めの声色には全く「死の恐怖」を感じさせないモノだった。

監獄で出会ったとき同様明るくて、楽しげな感じで話していた。

「ところで……ってミサカは話題を変えるけど……いい？ってミサカは

「ミサカは許可をとってみたい」

「？なんだ？」

「えっとね……」

『悟飯！』って言って欲しいの！ってミサカはミサカは懇願して
みる！！

出来なかつたら『魔貫光殺砲』でも構わないかも！ってミサカはミ
サカは……」

「待て待て待て！……」

今が護送中だということを忘れてツッコむエース。

「何を言わせたいんだ！？ってかどういう意味なんだそれ！？」

「だって……エースの声優さんとピッコロの声優さんは同じだから
…生エースの声が聞けたから、ついでにピッコロさんの声も聞きた
いかもってミサカはミサカは密かな願望を打ち上げてみたい！！」

「せ…声優ってなんだよ！それ以前に、ピッコロって何者だ！？」

「えっとね……ナメック星人だよってミサカはミサカはエースに教
えてあげることにする！！」

「人間じゃないのか！？そのピッコロって！！」

「人間のわけないよ、肌が緑色で触覚生えてるし……でも、カツコ
イイんだよってミサカはミサカはピッコロさんのことを述べてみる
！！」

「……………」

「ねえねえ！！いつてみてよあ〜ってミサカはミサカは目をキラ
キラさせながら懇願してみる！！」

「……………」
「ま…『魔貫光殺砲』……………」

「だめ！！もつと低い声で！！ってミサカはミサカは注文を出して
みる！！」

あと、これはピッコロさんの必殺技の一つだから、もつとテンション
上げて言っただけでもいいかもってミサカはミサカは追加注文してみ
た
り！！！！」

「……………」

「ほらほら早くく〜ってミサカはミサカは足をバタバタさせなが
ら懇願してみる！！！！」

「……………」 『まかた「ひびく」魔貫光殺砲』！！！！」

「うわあ！！本物そっくりってミサカはミサカは感動してみたり！
！！！！」

(緊張感ねえなあ……………)

真つ赤な顔をしながらも、ピッコロをはじめとする古川さんの物ま
ねをするエースと、それにはしゃぐ打ち止めを見て、ため息を隠せ
ない護送警護中の中将を含む海兵たちだった……………

Level 5 Level 4への階段付近

そこを走り抜ける4つの人影があった。

「処刑つてのは、いつ始まりやがんだ!？」

「今が約10時前…処刑は午後の3時!!」

その時刻には必ず処刑は実行される!!!

白ひげのオヤジが来るとするのならその何時間も前にしかけるハズ。

エースさんはもう海の上!!!

戦いはいつ始まってもおかしくない!!!」

「3時まで殺されることはないんだな!!!ならまだ間に合う!」

「フン………」

クロコダイルが列から抜き出ると、扉の前に躍り出た。

「扉なんざ無意味…」

この右手は渴きを与える。」

彼が右手を当てると、扉が砂になって消えていく……

そう、彼はスナスナの実の能力者で、大ざっぱにいうと、右の手のひらはあらゆるものの水分を吸収し、砂へと変えることができるのだ。

扉の向こうには大量の獄卒が待ち構えていた。

「こちらLevel 4!!!」

囚人「ジンベエ」「クロコダイル」侵入者「モンキー・D・ルフィ」
それから見覚えのない少年が現れました!!!!!! 応戦します!!!!!!

撃て!!!!!!」

しかし、銃弾など砂人間のクロコダイルには無意味。

「三日月形砂丘!!!」
バルハン

獄卒を砂にするクロコダイル。その一方で…

「撃て! 監獄弾だ!!!」

「ゴムゴムのぉ……………」

ルフィはそれを交わすと彼らの頭上に飛び上がり……

「雨!!!!!!」

回転状態で放つゴムゴムの銃乱打する。

「魚人空手 唐草瓦正拳」

ジンベエも正拳突きのような形を行った後、全方位360°に衝撃

波を発生させて、獄卒たちを吹っ飛ばす。

「うわぁー！勝てるわけがねえ！！……ん？おい、あの餓鬼はどうした！？」

見覚えのない少年の姿が見当たらなかった。

この戦いのさなか巻き込まれて死んだか？とその獄卒が思った時だった。

その少年はいた。平然とLEVEL 3 へ続く階段に向かって歩いてくる。彼はかすり傷一つ負わないで平然と笑っていた。

「撃て！！あの少年も妻わらたちの仲間だ！！」

「ア……めんどくせエなア……」

弾丸は彼に当たらずに、すべてが反射される……いや、正確な反射ではない。

そのすべてが的確に監獄弾を撃っていない獄卒にまであたるのだ。

一方通行はベクトルの向きの変換をして、銃弾をすべて監獄弾を持っていない獄卒に当てていたのだ。

が、もちろんそんなこと理解できる獄卒たちではない。

「どうしたア！？その程度かア！？」

その程度じゃアこの一方通行様は止まらねエぜ？

ってか、このままじゃア、てめエらは自滅だぜ？」

「か…構わん！！撃て！！数で何とか抑える！！」

構わず撃ってくる（ばかな）獄卒たち。

「はっ！！馬鹿だなア！！」

迷わず”向きの変換”をする一方通行。

その変換は極めて効果的な変換で、次々と監獄弾を持っていない獄卒のみ殺されていった。

「報告します！！！」

無線を使う獄卒。

「謎の能力者が現れました！！銃が効かず、ただの反射ではなく…その向きまでコントロール…うわああ！！」

「勝手に情報与えてンじゃねエの！！！」

弾丸をものともせず…かといって槍を振りかざしてくる獄卒も近づきだけで吹っ飛ばされ…

まだルフィ達が後ろで戦っているのを感じながら先へと進む。

「貴様！！何者だ！！どこ出身だ！！？」

「聞きてエのかア？」

俺は……アクセラレータ一方通行。地獄の土産に知っておくんだな！！」

学園都市最強の彼を止められるものは誰もいない。

彼は誰よりも早く、LEVEL 3へと続く階段を上り始めた。

第7話 助けられるものは助けるに越したことはない

「おい！！そういえば、アクセラレータの姿がみえねえぞ！！」

はあはあと荒い息をつきながらルフィは周りを見わたした。

ブルゴリの軍団や獄卒たちばかりで、特徴的な白髪のやせた少年が見当たらない。

「彼なら絶対に無事です、とミサカは断言します。」

軍用ゴーグルを装着し銃器を構える少女が言った。

「大丈夫って…何を根拠に言っているツチャブル？」

オカマ王イワンコフも言うが、少女は無表情のままだった。

「問題ありません。一方通行は現在予備のチョーカーをいくつも持っていますし、それに彼は学園都市最強の能力者で、一万体弱のミサカを無傷で殺した張本人ですから、とミサカはこいつらの頭じゃ分からないだろうと思いつつ説明します。」

「よくわかんねーけど、能力者なら心配いらねえな！

それより、出口はどこだ！？」

ルフィがLEVEL 4 の出口を探しているとき、すでに一方通

行はLEVEL 2 まで来ていた。
つい先ほどまでこのフロアには監獄長のマゼランがいたのだが、LEVEL 4 へ向かう大型リフトに乗り込んだところだったので、このフロアには毒の壁対策を考えているバギーとゆかいな仲間たちしかいない……

が、そんなことは最強の能力者には関係ない。

「な…なんだお前!？」

「脱獄者には見えないんだカネ!！」

とかごちゃごちゃ言う奴らには見向きもせず、ただ毒の壁をじいつと見た。

「……毒か……めんどくせエ……」

チョーカーの電源を入れ直すと、毒の壁に手を伸ばす。

「おい!!あぶねえぞ!!」「自殺行為だ!!」

「うっせエなア……」

彼が毒の壁に触れるや否、彼の能力によって毒の壁は反射され、向こう側へと吹き飛んだ。

毒が消し飛んだのが分かったと、チョーカーの電源をいったん切る。

「おお!!すげえ!!」

「LEVEL 1 への道が開いたぜ!!……って……」

壁の向こう側に立っていたのは……黒いひげを生やしたデカイ男が率いる謎の集団だった。

「ゼハハハハ！面白い能力だな、小僧！」

「……………」

「どうだ？俺の仲間になんねえか！？」

「…くだらねエ…………俺は自分の目的を果たすだけだ。」

ここで上条当麻や御坂美琴、おそらく打ち止めやその他、異世界トリップした一般人だったら目の前の男”黒ひげ”に敵意や悪意・憎悪といった感情が沸々と湧き出てくるだろう……………が、彼は違った。

彼はエースの処刑なんて知った事ではない。

海軍にも海賊にも興味がない。

物語の主人公・ルフィが今、ハンニバルと戦ってこの後すぐ、マゼランとまた戦うなんて知った事ではない。

彼の目的はただ一つ…………あの少女…………ラストオーダー「打ち止め」を助け出すこと…………
そのためだけに動いていた。

（確か…この世界の移動手段は『船』だったんだよなア…………となる
と軍艦を奪うしかねエか
つか、なりゆきで『協力する』ことになったアイツらが全然現れる
心配しねエ…………）

後ろを振り返るが、囚人たちを開放しながらはしゃぎまくるバギー
たちしかいない。

…………どうやら一人で軍艦を調達しなければならぬみたいだ。

外へ出ると、マゼランの命令で船が今まさに海へ乗り出そうとして
いるところだった。

「どれにしようかなア」

一方通行はニタリと笑みを浮かべると、チョーカーの電源を再びO
Nにした。

「一人で残る気ですか、とミサカは心の中を見破ってみます。」

ミサカは包帯グルグル巻きでクルクル回っている男：いや、オカマ
のMr.2 ボン・クレーに問いかけた。

彼は一方通行が手に入れた船にまだ、乗っていないかった。

……ジンベエ達やバギー一行がこの場所に着いたとき、10隻あつ
た船のうち、この船を残し、他の船は人の屍を乗せたオンボロ幽霊
船とかしていた。

ルフィが着次第、いつでも出航できる……それなのに、ボン・クレ
ーだけが乗船していなかった。

「誰かが残って『正義の門』を開けないといけないのよ。

あつしが一番確実にできる……！」

『正義の門』……インペルダウンを取り囲む門……これは内側から
開けないと開かない……」

「確かに成功確率は99%です、とミサカは分析結果をいいます。ですが、そのあとはどうするつもりなのか、とミサカはそのあとに待っている運命が分かっているのか聞いてみます。」
「それ聞くのヤボじゃナイ？」

苦笑するボン・クレー……ミサカは無表情のままだった。

「私の方が安全かつ正確に開けることができます、とミサカは宣言します。」

「あんたね……分かってるの!？」

あの門を開けるにはここに残る……つまり、誰かが犠牲にならないといけないってことなのよ!!

「アンタは脱獄囚ですらないじゃナイの!！」

「……確かにそうですが……」

ですが、ミサカの能力を駆使すれば船の上からでも開けることができます、とミサカは断定します。」

ボン・クレーの顔に驚愕が走った。

「ええ!!あなた、能力者だったの!！」

「ええ。ミサカは……」

「おい!!みんないるか!！」

「麦ちゃんのかえ!！」

ボン・クレーが振り返ると……………

「逃げるぞ！！軍艦はあるかっー！！！！」

こちらに向かって走ってくるルフィ達が出た。

……………猛毒を滴らせる監獄長のマゼランを連れて……………

「「「なんかすごい連れてる！！！！」」」

「確かに連れていますが…原作とは違い、こちらには船があります。だから少しは動揺が少ないようですね、とミサカは分析をします。」

「原作？」

「あなたには関係ありません、とミサカは断言します。では、私達も乗船しましょう。」

ボン・クレーやミサカ、ルフィ達も乗り込み、マゼランにやられたはずのイワンコフも『地獄ウイ^{ヘル}ンク』で地上に戻ることができ、船は出航した。

「いったいこれはどうということだ……………」

残っている船が全船、使えない状態になっていた。

「一体どうということだ！！」

微かに息のある獄卒に尋ねる。

「はあ…はあ…白髪の悪魔が…赤い目をした痩せた少年が…
たったひとりで…」

「たった一人!？」

「は…はい…攻撃を全て跳ね返し…何をしても歯が立たず…」

そんな囚人…聞いたこともない…驚愕を隠せないマゼランだったが、ここは冷静になるように努めた。

「まあいい…正義の門が開けられることはない。

奴らはあのままあそこで立ち往生をし、逃げることは出来ない。対策はゆっくり考えれば…」

マゼランは己の目が信じられなくなった。

正義の門が…開き始めている…

マゼランは動力室に走った。

「はあ…はあ…動力室!!何をしている!!!」

「そ…それが…何者かにハッキングされたらしく!!」

こちらからのコントロールが出来ません!!!」

「なんだと……！」

「……うまくいったのはミサカのお蔭ですね、とミサカは原作を変えたことを自慢してみます。」

「……この手があったとはなァ……そっぴや、てめェーも能力者だったな。」

弱すぎるから忘れてたぜ。」

「……一応これでもレベルは2〜3なんですよ、とミサカはシヨツクを少し上げたのでうなだれます。」

ミサカ…シスターズ妹達の能力はレベル2〜3程度の発電能力『レディオノイズ欠陥電気』。
本物の御坂美琴の『オリジナル超電磁砲』には二万體全員でかかっても歯が立たないとされているが、ハッキングなんてお手の物だった。

「でも……少しは人のためになれてよかったです、とミサカは安堵します。」

ルフィ達と笑っているボン・クレールを見たミサカ。

……本来なら彼が開けていた正義の門……

原作にはない仲間を加え、ルフィの奪った軍艦は……処刑の行われる

街、マリンフォーフォードへとタライ海流に流され進んでいく……

第8話 父親ってろくでなしに見えることが多い

「うわぁ………すげえな………」

ぐるりと360度どこを見ても水・水・水………まるで水中トンネルを思わせるところだが、水中トンネルの中ではなく、上条当麻は海の中にいた………しかも乗船している船ごと………。

上条は妙な事に気が付いた。

海の中にいるのになにも生物の気配がしない………

ONE PIECEの世界なんだから人魚や魚人がいてもおかしくないのに、魚一匹すら見かけなかった。

海の生物たちは、これから起こることを予測しているのだろうか？
そう考えると少し気味が悪くなってきた。

「ちょっと!!!!聞いているの!!!!」

ビリビリっと前髪に青白い電気を走らせる美琴がバシィッと上条の頭を叩いた。

「いてっ！聞いてますとも!!！」

ただどういう技術で海の中を船が進んでいるのか、気になったけ
だっ！!!！」

「……そっか、アンタの知識はまだシャボンディまでいってないのよね……」

「いいわ！！この美琴様が教えて上げる！！」

美琴が得意そうに腕を組む。

「見て分かると思うけど、船の周りをシャボン玉で覆うのよ。これをコーティングっていうの。」

えっと……たしか、船全体をヤルキマン・マングローブのシャボンで包みこむことで海中航海を可能にするの。これは深海1万mの水圧にも耐える事が可能で、多少の穴が開いたくらいでは影響はないんだけど、海王類などに噛まれて多数の穴が開けば潰れるのよ。」

「へえ……学園都市も真つ青な技術だな。」

「そういうこと。」

で、話を戻すけど……アンタは何をするのか分かった？」

美琴が話を”作戦”の方に戻した。

作戦とはもちろん、エースをいかに被害最小限で救い出すかという作戦だ。

原作を知らない上条は美琴にまかせつきりだったのだが……

「でもさ、これって俺、あんまり必要なくない？
ってかさあ、俺、いらなんじゃない？」

作戦内容を聞いた上条がツッコむ。

「だって、アンタの能力は確かに凄いけど、敵さんは能力+体力+腕力…ついでに脚力もあんの。」

能力者だからって一方通行やアタシみたいな能力に頼り切っている奴は少ないの。

ほら、例えばエースだって、能力者だからそれに頼り切れればいいのに、筋肉が凄いでしょ？だから、仮にアンタの力で能力を消したところで気休めにしかならないのよ。」

「……ってことで、俺はこんな役回りしかできねえってのか……」

なんかやるぞ！！って盛り上がったのに……不幸だ……」

がつくし…と肩を落とす上条…

「まあ、気になさるなって！！これも重要な仕事よ！？」

美琴が上条の肩を笑いながら叩く。

「うう…中学生に慰められる高校生って……」

ってか、前もこんなこと感じたような気が……」

上条の憂鬱に関係なく…白ひげ海賊団はマリンフォードへ進んでいく……

海軍本部のある島”マリンフォード”

ここにはおもに海兵の家族が暮らす大きな町がある。

現在、住人達には避難勧告が出ており……

避難先のシャボンディ諸島からモニターによって…人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所から集まった記者やカメラマンたちもまた

ここから世界へ情報をいち早く伝えるために身構えていた。

海軍から出される監視船は出航の度に撃沈され、”白ひげ”の情報も皆無……

マリンフォードに集まる緊張は高まるばかりで

せまる処刑の時間までとうとう3時間をきっていた。

ここには世界各地より集められた名のある海兵たち総勢約10万人の精銳がにじり寄り寄る決戦の刻を待っている……

三日月形の湾頭及び島全体を50隻の軍艦が取り囲み、湾岸には無数の大砲が立ち並ぶ……

港から見える軍隊の最前列に構えるのは、戦局のカギを決める曲者たち

海賊”王下七武海”

そして広場の最後尾に高くそびえる処刑台には事件の中心人物

白ひげ海賊団二番隊長”ポートガス・D・エース”が運命の刻を待つ……

その眼下で処刑台を固く守るのは、海軍本部最高戦力

3人の”海軍大将”

今考えうる限りの正義の力が、白ひげ海賊団を待ち構える……

が、そこにイレギュラーが混ざっていた。

「…おい！エースの横にもう一人…誰かいるぞ？」

「本当だ！つてかアレ…子供じゃないか？」

「エースとどういった関係だ！？」

ざわざわと報告とは違う事態に周囲と話す海兵たち…だったが、処刑台に海軍大将・仏のセンゴクが現れたことで水をうったかのようになり、シーン…となった。

アフロヘアと口ひげが特徴で、実物大のカモメのオブジェを載せた軍帽と黒縁の丸眼鏡を着用している男…それが海軍元帥・センゴク…。

センゴクが手のひらに載せている電伝虫を使おうと口を開いたそのとき…！

「うわぁ…！あそこにスモーカーがいる…！つてミサカはミサカは原作キャラに指をさしてみたり…つていうか、手錠されているから本当は指をさしていないんだけど、心の中では指しているからそれでいいか、つてミサカはミサカは自分で納得してみたり…！」

…エースの横で手錠につながれていた打ち止めが声^{ラストオーダー}を上げた。

シーンと静まり返った中だったので、彼女の甲高い声は島全体に響き渡っていた……
もちろん、シャボンディ諸島のモニターを通じて、シャボンディ諸島にも……

「……スモーカーさん……知り合いですか？」

彼の部下で眼鏡の女剣士・たしぎ少尉が尋ねた。

「いや……しらねエ……だれだあれ？」

常に2つの葉巻を吸っているほどのヘビースモーカーで、自然系悪魔の実・モクモクの実の能力者・白獵のスモーカー准将は少し眉間にシワを寄せた。

あんな小娘みたことがない。なのになぜかもものすごく馴れ馴れしい……
……
忘れているだけかとも思ったが、全く記憶にない……。

「ねえねえ、結局”けむりん”って誰と付き合っているの？ってミサカはミサカは長年の疑問をズバリ聞いてみたり!!」
「てめえ!!何を分けわかんねエこと言ってるんだ!？」
「つてか、そのあだ名は止める!!」

「ええ!?!なんで?ってミサカはミサカは抗議の色をあらわしてみたり!!」

っていうか、質問に答えてほしいんだけど、ってミサカはミサカは口をタコのように膨らませてみる！

ねえ、誰？たしぎ？それともヒナ嬢？どっちってミサカはミサカは二択にしてみる！」

「どっちでもねえ！！！」

「一体そのガキは何者なんですか！！！」

スモーカーはセンゴクにむかって声を張り上げる。

「分かった。今から説明しよう。」

センゴクは、実は自分も気になっていた事柄だったのに話題を変えられ、少し機嫌が悪かったが、気を取り直すところにした。

……で、話が始まったのだが……若干2人……怒りに燃えてセンゴクの話など耳に入らない男たちがいた……

「ゆるさねえ……アイツもヒナ嬢を狙っていたのか……！！！」

「愛しのヒナ嬢はこのフルボディのものなのだ。だれにも渡すものか！」

海軍大佐・黒檻のヒナの部下で雑用要員のジャンゴとフルボディが沸々とライバル出現の怒りに燃えていた……

が、そんなことはどうでもいいので、さっさとセンゴクの話に戻すことにしよう。

「…エース…お前の父親の名前を言ってみる。」

「…俺の親父は…白ひげだ!」

苦悶の表情の後、エースは絞り出すように答えた。

「違う!」

「違わねエ!!他にいねエ!!」

「…南の海にバテリラという島がある…」

母親の名前はポートガス・D・ルージュ…」

この女は我々の頭にある常識を覆し…我が子を思う一心で海軍の目を欺くために、20か月もの間エースを胎内に宿し続けた…」

センゴクの重々しい口からエースの出征の秘密が語られていく…

「そしてお前を生むと同時に力尽き果て死んだ。」

父親の死から一年と三か月を経て…世界最大の悪の血を引いて生まれてきた子供…それがお前だ。」

打ち止めが現れた時以上にざわつく海兵たち。
エースが唇を噛みしめ下を向き続ける……

「お前の父親は海賊王”ゴールド・ロジャー”だ！！！！」

「……………！！！！！！？」

周囲に今日最大のざわめきが走った。
シャボンディにいる記者の中には手帳を落とす者までいた。

「い……生きていたのか……海賊王の血が……」

「じゃ……じゃああの女の子は？」

「白猫の知り合いか？それがなんで処刑？」

「この少女……ラストオーダーは誰にも見つからずに地獄の監獄・インペルダウンに侵入に、エースの元へとたどり着いた……まあそこでとらえたわけだが……」

インペルダウンの職員が言うには、彼女は”エースの親族”らしい……」

正確にはインペルダウン職員は”妹”と伝えられたのだが、伝言ゲームに例えると分かりやすいと思うが、最初は”妹”と伝わってきたのに、いつのまにか”親族”に変わり……そのままセンゴクの耳に入ったのだった。

さらなるざわめきが沸き起こった。

「ガープ…本当かい？」

一応エースの育て親…海軍中将ガープに、同じく中将の紅一点…にしては歳を召されているツルが尋ねた。

「いや、知らん。馬鹿者が……」

あんな可愛い娘を作ったならなぜワシに報告せん!!」

「ちげえよ、ジジイ!!!!」

ガープの声を聴いたエースが声を張り上げた。

「嘘はいかんど、エース!!
いったいいつ作ったのじゃ!!いや、そもそもその子の母親はどうした!!」

「母親も何も俺の子じゃねエ!!!!」

「”白ひげ”の所の女か? ナースか?」

「だから!!聞けって!俺は……」

「センゴク元帥!!報告します!!」

「!?!?」

いきなり声を上げた海兵…ものすごく必死な顔をして敬礼をしていた。
なんか涙が出かかっていた。

「せ…『正義の門』が誰の指示もないのに開いています！
動力室とは連絡が取れず…」
「なんだと!?!」

見てみると、確かに開いている……
エースもガープも言い争いをやめてしまった。

「来たぞおー！ー！！全員戦闘態勢！！」
「突如現れたぞ、一体どこから！！！！」

ゴゴゴーっつと音を立てながら徐々に近づいてくる船…
それも一隻に二隻ではない。

個性それぞれの色を持つ大艦隊だった。

海軍は大慌てだった。

「海賊船の大艦隊だあ！！」
「白ひげ」はどこだ！？確認しろ！！」
「遊騎士ドーマ」 雷卿マクガイ” デイカルバン兄弟” …” 大
渦蜘蛛スクアード” ……！！！！

ゴボボ……ゴボボ……

耳にとらえるは泡の音……

「まさか……！」

そのことにセンゴクをはじめとする何人かの海兵が気づき始めた。

「えっ！この音……どこから？」

ゴボボ……ゴボボボ……

一般海兵たちに聞こえるくらい大きくなってきた泡の音……

「………こりゃあ、とんでもねえ場所に現れはしねえか？」

「布陣を間違えたかねエ」

みるみる間に三日月形の湾内に四つの巨大な影が浮かび上がった。き

「湾内に海底に影が!!」

「まさか……」

そうだったのか、あいつら全船……!!

コーティング船で海底を進んでたのか!!」

驚きの色を隠せないセンゴク……

ザッパアアン!!!!!!!!!!

突如、巨大な白い鯨型の海賊船が湾内に姿をあらわした!

「”モビー・ディック号”が来た!!!!」

「次いで3隻の白ひげ海賊団の船!!!!」

新たに現れた3隻の船はモビー・ディックより少し小柄な黒鯨型の船だったが、巨大であることには変わらない。

「湾内に侵入されました!!!14人の隊長もいます!!!!」

「”白ひげ”……」

恨みのこもったまなざしをむけるセンゴク……

「グララララ……何十年ぶりだ？センゴク……」

カッン…カッン…とモビー・ディック号…白鯨をかたどったの頭部
に向かって進む足音が響く…

「俺の愛する息子は無事なんだろうな……！！！」

三日月のような白ひげを蓄えた、地肌 directly コートをマントのよう
に羽織っている、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男……”白
ひげ”こと……”エドワード・ニューゲート”が姿を現した。

「グララララ……」

ちよつと待つてる…エース！！！」

なんで来たんだよ……おれなんかほっておいてもいいのに……

「オヤジイイイ……！！！」

エースは力いっぱい叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727x/>

とある魔術の頂上戦争

2011年10月25日15時05分発行